

JA全農ウィークリー

J A Z E N - N O H W E E K L Y

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

3面

ザルビオ×KSAS

水稲可変施肥試験実施

(福岡県本部)

5面

「JA全農×

日本ハム共創プロジェクト」始動

(畜産総合対策部)



配送先変更(住所・宛名)、
配布部数変更はこちら



News!



エコファーム水牧に全農経営管理委員会会長賞贈呈

第52回全国豆類経営改善共励会で表彰式

麦類農産部

全農の高尾常務（左）とエコファーム水牧の高澤さん



全農は6月14日、東京・明治記念館で開催された「第52回（令和5年度）全国豆類経営改善共励会表彰式」（主催：JA全中、（株）JA新聞連）に出席し、全農経営管理委員会会長賞を受賞した農事組合法人エコファーム水牧代表理事の高澤和雄さんに全農の高尾雅之常務理事より表彰状を授与しました。

全国豆類経営改善共励会は、豆作の経営改善の面から先進的で他の範となる経営体や生産集団を表彰するとともに、その成果を広く紹介するものです。

1972年度から開催されており、今年で52回目を迎えました。9人の審査委員による厳正な審査の結果、富山県小矢部市のエコファーム水牧が全農経営管理委員会会長賞を受賞しました。

全農は共励会などを通して、安定した収量確保の実現と経営改善に取り組む生産者とともに、消費者をはじめ産地へ情報を発信し、国産大豆の生産拡大・安定供給に向けて、さらなる産地振興に努めます。

News!



子実とうもろこしのドローン防除実演会

JA古川と大規模実証3年目、研究会で成果と課題を報告

米穀部

多くの関係者が見守る中、ドローン防除を実施



全農は7月2日、宮城県のJA古川の全面的な協力のもと、JA管内圃場でドローンによる防除実演会を実施しました。宮城県大崎合同庁舎で子実とうもろこし研究会も開催し、全国から157人が参加しました。

実演会では、JA古川と大規模実証に取り組む宮城県本部の阿部茂副本部長が、栽培面の課題であるカビ毒の抑制には適切な殺虫剤散布が重要であると説明。アワノメイガに効果がある殺虫剤のドローン散布を実施しました。約1畝の散布面積に対し、作業は15分ほどで完了。今後、自動散布による効率化・省力化が期待できます。

研究会では、全農の耕種総合対策部、施設農住部、畜産生産部からそれぞれ排水対策やカビ毒の抑制に向けた防除や収穫後の乾燥・調製の調査結果や留意点、飼料利用の現状と課題を報告。営農・技術センターも、カビ毒検査の受託について紹介しました。大崎農業改良普及センター、農研機構東北農業研究センターからは今後の展望について講演がありました。

JAの集落運営委員会大豆・麦・子実用トウモロコシ生産組織連絡協議会の鈴木正一会長は「子実とうもろこし栽培によって、農業の発展につなげていきたい」と意気込みを語りました。



ガルビオ×KSAS水稻可変施肥試験実施

圃場の地力を見える化—可変施肥により生育むらの改善へ

福岡県本部



可変施肥対応の田植機



関係者が見守る中、田植えと同時に可変施肥を実施

同試験はJAみい、福岡県朝倉農林事務所久留米普及指導センター、クボタアグリサービス(株)の協力のもと、JA管内の農事組合法人「新田」の圃場^{ほじょう}で水稻「元気づくし」の田植え^{はら}の際に行われました。

今後、定期的にJA、久留米普及指導センターと同圃場の生育調査を実施し、ガルビオの生育予測や病害防除推奨アラート機能も活用しながら、効果を実証します。

8月上旬の穂肥では、ドローンをういて可変施肥と、均一施肥をそれぞれ実施し、生育への影響を確認する予定です。また、従来の方法で栽培する慣行区との生育具合や収量の違いを調査していきます。

福岡県本部は6月18日に栽培管理支援システム「ガルビオ[®] フィールドマネージャー」と(株)クボタの圃場^{ほじょう}管理システム「KSAS^{ケーサス}」とを連携し、水稻の生育むらの改善を目的とした可変施肥試験を実施しました。



カプセルトイのご当地牛乳を飲み比べ

牛写真家のトークショー、酪農家とアイスクリームづくりも

酪農部



朝から行列ができた飲み比べ



クイズの司会をする酪農家の関さん(左)と長崎さん(右)

全農が監修したカプセルトイ「ご当地牛乳コレクション」の第2弾発売を記念し、第1弾と第2弾で登場する計11種の牛乳と全農酪農部が開発した「ミルクティー」を追加した全12種の飲み比べを行いました。

全農が監修したカプセルトイ「ご当地牛乳コレクション」の第2弾発売を記念し、第1弾と第2弾で登場する計11種の牛乳と全農酪農部が開発した「ミルクティー」を追加した全12種の飲み比べを行いました。

別会場では牛写真家の高田千鶴さんの著書「牛が教えてくれたこと」(出版社: 緑書房)の出版を記念し、トークショーを開催しました。高田さんが牛への思いを語り、会場は温かい雰囲気になりました。

群馬県関牧場の関千鶴さん、千葉県加茂牧場の長崎清子さんの2人の酪農家を招いた「酪農家とのアイスクリームづくり体験」も開催。クイズを挟みながら参加者は酪農家との交流を楽しみ、酪農への理解を深めました。当日は物販も含め約1500人が来場するなど、イベントを通して牛乳・乳製品の魅力を発信しました。

全農は6月29日、牛乳の消費喚起や酪農の理解醸成を目的に、JA東京アグリパーク(東京都渋谷区)で全国11種類のご当地牛乳と乳飲料の飲み比べイベント「カプセルトイになったご当地牛乳をギュウつと集めました」を開催しました。

News!



「ぐんまルシェ in 豊洲 千客万来」を開催

群馬県産青果物や豚肉加工品、こんにゃくなどをPR

群馬県本部



旬の青果物や花きをそろえた「ぐんまルシェ in 豊洲 千客万来」



Instagramフォロワー限定イベント「ガーベラつり」

今年2月にオープンした「豊洲 千客万来」のお祭り広場では、県産青果物や花き、県産豚肉を使用した肉みそ、特産品のこんにゃく製品などの即売会を行いました。また、即売会で販売する肉みそを添えた青果物やこんにゃくの試食、県産花きを使用した「つる舞う形の群馬県」オブジェの展示のほか、県内JAのゆるキャラによるPRも実施しました。

試食で使ったキャベツは、県内の主要産地である嬬恋産のキャベツで、試食をした来場者から「おいしい」と好評でした。県本部が運営するInstagramアカウントのフォロー限定イベント「ガーベラつり」も実施するなど、イベントは多くの家族連れでにぎわいました。

群馬県本部は6月15日、東京・豊洲市場に隣接する商業施設「豊洲 千客万来」(江東区)で県産農畜産物即売会「ぐんまルシェ in 豊洲 千客万来」を開催し、産地プロモーション活動を行いました。

News!



「2024いわて純情むすめ」を認定

35代目5人、県内外で岩手県産農畜産物をPR

岩手県本部



いわて純情むすめに認定された(右から)加美山さん、大久保さん、瀧澤さん、桐明さん、新井田さん



天津木村さんからたすきが授与されました

今年度は45人の応募者から、いづれも県内在住の大学生、加美山結葉さん、大久保佳奏さん、瀧澤せりなさん、桐明未唯沙さん、新井田彩那さんの5人が2024いわて純情むすめに選ばれました。

認定式では、岩手県本部の高橋司県本部長から一人一人に認定証が手渡されたほか、「純情産地いわて応援団長」の天津木村さんからたすきが授与されました。

2024いわて純情むすめを代表して瀧澤さんが「笑顔を絶やすことなく、純情産地いわての農畜産物の販売・PRに精いっぱい取り組みます」と決意を表明しました。

任期は今年7月から来年6月末までの1年間で、さまざまなイベントなどを通じて県産農畜産物の魅力をPRしていきます。

岩手県本部は6月25日、盛岡市内で「2024いわて純情むすめ」の認定式を行いました。いわて純情むすめは、岩手県の農畜産物をPRすることを目的に、1989年から公募を開始し、今年で35代目となります。

「JA全農×日本ハム共創プロジェクト」始動

連携により国内畜産業の持続可能性を追求

全農は7月9日、国内食

肉最大手の日本ハム(株)と畜産分野における包括的事業連携に係る協定書を締結し、記者会見を開催しました。会見には、日本ハムの井川伸久代表取締役社長、前田文男取締役専務執行役員、全農からは桑田義文代表理事専務、齊藤良樹常務理事が登壇し、「JA全農×日本ハム共創プロジェクト」に

ついて説明しました。

多くの報道陣が集まるなか、冒頭の代表者あいさつで日本ハムの井川社長は、全農が持つバリューチェーンと同社の技術や販売力などを生かし「持続可能な畜産・食品事業の実現に向けた取り組みを加速させたい」と抱負を述べ、桑田専務は「消費者側に立つ日本ハムと生産者側に立つ全農が手を携えることは大きな意義がある」と強調し、同プロジェクトに全力を尽くすと意気込みを語りました。

同プロジェクトでは、①国内畜産業の持続可能性の追求②次世代畜産業モデルの確立③畜産たんばく質の安定供給④両者事業の共創の4項目を共創項目として掲げています。

両者のもつ研究所やノウハウを生かし、環境負荷の低

減や、未利用となつている畜産資源の活用に取り組みほか、国産飼料の自給率の向上に向けて子実ともろこしの共同利用なども検討していきます。

食肉処理施設という切り口では相互利用や自動化、処理場を起点とした物流の効率化を検討するほか、全農が持つ輸出認定工場の共同利用など輸出の拡大にも取り組むこととしています。

またJA全農ミート

フーズ(株)高崎ハム工場にお

ける日本ハム製品のOEM生産(受託製造)や、物流2024年問題を背景とした共同物流など、相互の施設等の利活用により両者の事業の効率化も図っていくこと

消費者に
畜肉たんばく質を
お届けし続ける社会
持続可能な社会

相互の強みを活かし
日本畜産の持続的発展に貢献

▼プロジェクトの目指す姿



▼事業連携の取り組みテーマ

国内畜産業の 持続可能性の追求	➢ アニマルウェルフェアの取り組み ➢ カーボニュートラル農場の基準づくりに向けた取り組み ➢ 脱プラスチックの取り組み ➢ 国産飼料の自給率向上
次世代畜産業モデルの確立	➢ 畜産分野における共同研究・事業開発 ➢ 糞尿・メタンのエネルギー化 ➢ 畜肉由来素材の活用
畜産たんばく質の安定供給	➢ 処理場施設の活用・連携 ➢ 国産品(和牛など)の海外輸出拡大に向けた取り組み ➢ 国産農畜産物を活用した商品開発
両者事業の共創	➢ 全農施設を活用した包装肉およびハム・ソーセージの生産連携・活用 ➢ 連携による物流課題の解決(共同配送など)

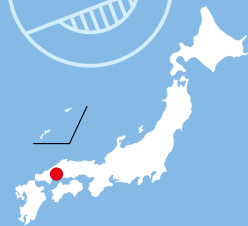
としました。

全農は、畜産業の未来に向けた取り組みとなる「JA全農×日本ハム共創プロジェクト」を推進することで、国内畜産業の持続的発展を目指します。

7月9日の記者会見に登壇した(左から)日本ハムの前田専務、井川社長、全農の桑田専務、齊藤常務

県本部 だより

広島県本部



環境保全と持続可能な農業を目指して

耕畜連携・資源循環ブランド「3-R」(さん・あーる)

広島県本部では2019年度から耕畜連携・資源循環ブランド「3-R」(さん・あーる)の取り組みを開始しました。「3-R」とは、「耕畜連携」による資源循環型農業で生産された農畜産物や加工品のブランドです。

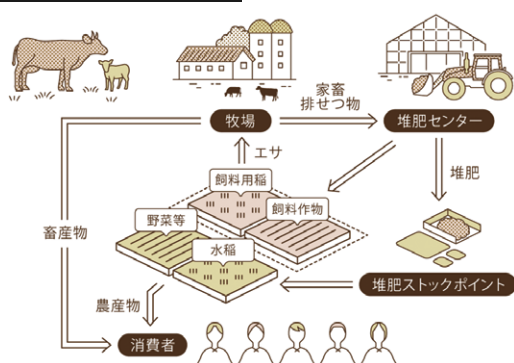
資源化・再利用・繰り返し 地域の魅力を未来に伝える

「地域の魅力を未来に伝えるために」をスローガンに、畜産業で出た堆肥を「資源(肥料)(RESOURCE)」と

して「再利用(RECYCLING)」する資源循環・耕畜連携の取り組みを「繰り返し(REPEAT)」していくことで、地域の環境保全と持続可能な農業を目指しています。

「3-R」を立ち上げた背景には、

耕畜連携の取り組みイメージ



3-Rブランドの各種商品

3-RのHPはこちら

耕畜連携・資源循環
ブランド3-R



3-Rブランドロゴ



県内の耕地面積の減少に伴う荒廃農地の増加や、化学肥料の原料を輸入に依存している一方で、資源である畜産堆肥の活用は十分ではないという状況がありました。これらの問題を解決するために、18年度から耕畜連携の取り組みを進めてきました。

畜産業で出た堆肥を肥料として活用することは、耕種農業において重要な土づくりに貢献するだけでなく、化学肥料の投入量を抑えるので、環境負荷軽減にもつながります。現在、県本部では、販売部門だけでなく生産・管理部門も一体となり、販売・生産の両輪で「3-R」の取り組みを進めています。

鶏ふん堆肥の有効活用へ 広島大学、県とも連携

22年度からは広島大学と連携し、「水稻栽培における鶏ふん堆肥の有効活用」について共同研究を行っています。同研究は、県内で年間約40万トにも及ぶ鶏ふん堆肥を活用することにより、国内の肥料資源の有効



鶏ふん堆肥を散布する様子

活用や生産コストの低減を目的に取り組んでいます。

3年目を迎える今年度は環境負荷への影響を調査するため、広島県とも連携し、温室効果ガス発生量の測定や中干し期間の延長による収量や品質への影響などの研究も予定しています。将来を見据え、耕畜連携・資源循環による持続可能な水稻栽培を目指します。

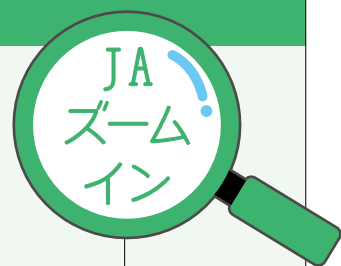


特産「八色西瓜」

新潟県のJAみなみ魚沼は、南魚沼市と湯沢町を管内とし、主たる農産物である南魚沼産「コシヒカリ」に加えて、園芸品目との複合営農を推進しながら、農業者の所得増大、農業生産の拡大に向けて取り組んでいます。

**南魚沼産「コシヒカリ」
「八色西瓜」が推奨品目**

JAでは、水稻とスイカ



水稻＋園芸品目の複合営農で

農畜産物100億円産地を目指す

による複合営農推進を積極的に行っており、露地栽培では、「八色西瓜」を推奨品目と定めています。管内は、八海山をはじめとする越後三山を眼前に、周囲を山々に囲まれた盆地地帯で、土壌がスイカ生産に適した黒色火山灰土であることと昼夜の温度格差が激しいという地理的条件に恵まれています。そのため、糖度が高く、シャリ感のあるスイカの生産が可能です。

**独自の品質検査で
おいしさを保つ**

スイカは外観から内部の品質を判断することが難しく、「当たり・外れがある」と言われますが、「八色西瓜」は外れがない」と、市場から



目合わせ会で出来栄を確認



「八色西瓜」いよいよ収穫



選果場を流れる「八色西瓜」



「八色西瓜」を買い求める来場者

高い評価を受けています。出荷を目前とした7月中旬には、市場関係者を含めた目合わせ会を実施し、高品質なスイカの出荷に取り組んでいます。出荷は、独自の検査基準を設けた自動選果施設で、外観・空洞・糖度をセンサーで測定し、格付けを実施。今後は、生産量の拡大に対応できるよう、大玉・小玉

併用の新たな選果施設を取得予定です。

**直売所でスイカまつり
県内外から多くのファン**

JAが運営する農畜産物直売所「あぐりばーく八色」では、7月25日～8月8日に「八色西瓜まつり」を開催しています。毎年、県内外から多くの「八色西瓜」ファン

が買い求めに来るほどにぎわい、JAの一大イベントとなっています。

今後も農業者の所得増大を使命とし、安心して農畜産物の生産活動に取り組めるよう、「売れるモノづくり、担い手づくり、生産環境づくり」に取り組み、地域農業の発展に向けて取り組んでいます。

JA みなみ魚沼 (新潟県)



概要		2024年2月29日現在
正組合員数		7350人
准組合員数		7834人
職員数		456人
販売品取扱高		72億2千万円
購買品取扱高		45億3千万円
貯金残高		1242億5千万円
長期共済保有高		3689億7千万円
主な農畜産物	米、スイカ、シイタケ、 エノキタケ、ブナシメジ、ユリ切り花、 ミニトマト、カリフラワー	

ヤマザキ×ニッポンエール クリームシューとロールケーキ

「農協ミルク珈琲」を原料にスイーツ

全農は、山崎製パン(株)および協同乳業(株)と連携し、「農協ミルク珈琲」を原料に使用したクリームシューとロールケーキを共同開発しました。7月24日から首都圏の小型食品スーパーまいばすけっとで期間限定販売しています。【営業開発部・酪農部・協同乳業(株)】

今回発売する「ヤマザキ×ニッポンエール ミルク珈琲風味クリームシュー」と「ヤマザキ×ニッポンエール ミルク珈琲風味ロールケーキ」のクリームには、協同乳業の商品「農協ミルク珈琲」を使用しています。また、商品パッケージも「農協ミルク珈琲」を連想させるデザインとしました。

同じく協同乳業の「農協牛乳」を使用したクリームシューとロールケーキも同時に販売します。

全農は、国産農畜産物の消費拡大や生産振興に向けて、今後もニッポンエールの取り組みを全国の産地・品目に拡大していきます。

- ① ヤマザキ×ニッポンエール ミルク珈琲風味ロールケーキ
- ② ヤマザキ×ニッポンエール ミルク珈琲風味クリームシュー



「国産大豆商品発見コンクール」を初開催!



小学生対象に「見つけて」「食べて」「魅力を伝える」



全農は消費宣伝活動の一環として、小学生を対象とした「国産大豆商品発見コンクール」を7月19日から9月8日までの期間で開催しています。このコンクールを通して、国産大豆や大豆製品への興味・関心を深め、国産大豆を身近に感じてもらうことを目指しています。【麦類農産部】

コンクールは、国産大豆を使用した商品を「見つけて」「食べて」「魅力を伝える」キャンペーンです。豆腐・納豆・豆乳・その他の4部門で審査を行い、各部門の上位入賞者には大豆商品詰め合わせをプレゼントします。小学生の夏休みの自由研究としてもお勧めです。

全農は今回のコンクールを通して、中長期的な需要拡大に取り組むとともに、国産大豆の安定的な生産と販売を推進していきます。

詳細は特設サイトもしくは全国のAコープ店舗で配布中のチラシをご覧ください。



「国産大豆商品発見コンクール」のチラシ



特設サイト

www.kokusantakusan-zennohdaizu.jp



ハロー!! JA全農にいがた

全国有数のエダマメ栽培面積を誇る新潟県でも特産品の「くろさき茶豆」は、2017年に地理的表示法に基づく地理的表示品目(GI登録)に登録されています。

昭和初期に山形県から譲り受けた種が小平方地区に普及したことが始まりとされています。種子や豆の薄皮、さやの毛が茶色という見た目に加え、独特の香りが特徴です。

鮮度を第一に考え、まだ暗く気温が低い早朝に収穫することで、うまみを保ったまま新鮮な状態で皆さまの元へお届けします。



新潟県産くろさき茶豆 本茶豆 1.5kg
...4100円(税込み) ※7月末ごろより発送予定

ご注文はこちら



▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com



『JA全農トピックス』の公式
X(旧Twitter)はこちら



私たち全農グループは、
生産者と消費者を 安心して結ぶ懸け橋
になります。